

「敵を愛せよ」



宗教部長
佐々木 哲夫

イエス・キリストの言葉「敵を愛せよ」は有名ですから、皆さんも耳にしたことがあると思います。旧約聖書、特に、『詩編』には「敵」の具体的な姿が数多く描写されています。例えば、敵とは、不法や不正を行い、貪欲で、怒り・憎しみ・勝ち誇る者、また、相手を嘲り、苦しめ、虐げ、辱めを与え、命さえも奪おうとする者と描写されています。今日ならばいじめをする者や虐待する者も含まれることでしょうか。聖書は、そのような者たちを「愛せよ」と命令形を用いて記しています。読者は、自分に敵対する者の行為を許すのかと当惑し、「敵を愛せよ」を実行することに躊躇を覚えるのではないのでしょうか。イエス・キリストの言葉「敵を愛せよ」について一緒に考えてみた

イエス・キリストの言葉「敵を愛せよ」

いと思います。

(四三) あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。(四四) しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

マタイ五章四三〜四四節

四四節に注目しますと、「敵を愛せよ」が「自分を迫害する者のために祈りなさい」と言い換えられています。「祈ること」は、「愛すること」を割り引いた表現ではなく、むしろ愛の本質を示しています。例えば、自分に敵対する者について祈るとき、まず、心を静め、相手

のことについて考えなければなりません。祈り心のなかに敵を入れるのですから、これまでと全く違った角度から相手を見る機会となります。まさに、新しい人間関係構築の出発点です。『敵を憎め』ではこれではできません。ところで、大学生活であれ社会であれ、私たちは大勢の人と共存することを求められています。大勢ですから、意見の異なる人や考え方の異なる人も含まれます。なかには、敵のように振る舞う人もいます。独裁体制ではないのですから、だれとでも一緒に協同することが求められます。そのようなとき、「敵を憎め」ではなく「敵を愛せよ」の言葉は、私たちの心の中で、道を照し出す光として輝くのではないのでしょうか。

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

大学礼拝

WORSHIP SERVICE

2010年
サマーカレッジ
秋季特別伝道礼拝特集号



CHAPEL NEWS
第114号

「隣人として生きる」

ルカによる福音書 第10章 25節～37節



社団法人好善社 理事長

棟居 勇

です。

「善いサマリア人」の譬の大事なポイントとは、譬の中で律法学者が「隣人は誰か」と隣人を「対象」として捉え、それを問うたのに対し、主イエスは隣人を「主体」として示されたことです。「隣人」は、それが誰であっても、「助けを必要としていた私を、助けてくれた人」です。

私は、ハンセン病に関わって、もう半世紀近くにもなりますが、私に特別な関心とか使命感があったからではなく、ハンセン病の人々が、主が言われるような意味での「隣人」として私に出会ってくれたからなのです。それがあまりにも鮮烈な出会いであり、それに応えようと努めた結果、いつの間にか半世紀あまりが経ってしまったということなの

この好善社は、東京にある女子学院

一九六一年夏、私は神学校の学生に課せられる夏期伝道実習で初めて四国のハンセン病療養所に行きました。それまで療養所に行ったこともなく、ハンセン病についてほとんど何の知識も持たないまま、ただ無知故の不安と恐れを心のうちに秘めて出かけていったのでした。確かにそこには、顔や手足、体がハンセン病の後遺症によってひどく損なわれた人々がいました。けれども、その人々が私に「人間」を見せてくれ、「人間とは何か」「人間は何によって人間になるのか」「人間が生きてはどのようなことか」ということについて深く教えられたのです。私はその夏、こうした人々との出会いによって「霊的に助けられた」と強く思っています。ハンセン病の人々が、私の「隣人」だったのです。この隣人との出会いによって、「人間とは何か」という人間の根源に関する事柄について大きく眼が開かれ、その後の人生がそれによって導かれ、支えられるようになりました。

一年後の一九六二年に好善社の一員に加わり、その後牧師になった後も、好善社の社員としてハンセン病に関わり続けて、今日に至っています。

の前身校の創立者ミス・ヤングマンが一八七七年に二〇人の女子生徒と始めたボランティア団体ですが、創立一七年後の一九九四年に、一人のハンセン病患者との出会いから、ハンセン病患者を始め、ハンセン病伝道団体となったのです。主が「善いサマリア人の譬」を語られた時、そこで語られたのは、実は主ご自身のことだったのです。私たちが救われたのは、まさに主がそのように、倒れていた私たちの「隣人」となってくださったからです。最も根源的な意味での「隣人」は、主イエスです。

私たちは、直接この主の「隣人」を経験し、また主によって生きる様々な「隣人」との出会いをおし、私たちも誰か（それは誰であってもよい）の「隣人」となって生きる。そこに、「ほんとうの人間」としての生があるのです。それは極めて単純なことであって、少しもむずかしいことではありません。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

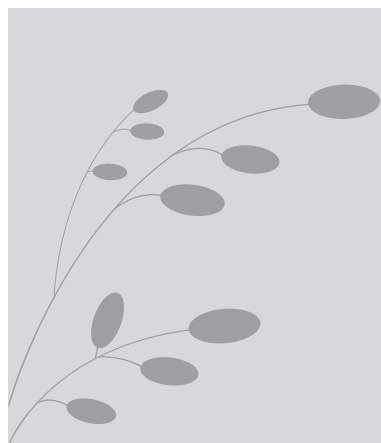
◆棟居勇 先生

一九三六（昭和一一）年生まれ。一九五九（昭和三四）年国際基督教大学教養学部卒業。一九六三（昭和三八）年東京神学大学大学院修士課程修了。

日本基督教団洗足教会、長崎古町教会、鹿児島教会、鎌倉雪ノ下教会、奥沢教会の教師を経て、二〇〇四（平成一六）年より社団法人好善社常勤。

好善社入社は一九六二（昭和三七）年、一九九九年（平成一一）年に理事長に就任し、現在に至る。

棟居先生には、十月五日（火）に泉キャンパス、六日（水）に土樋キャンパス（朝）の礼拝をご担当いただきました。



「道をそれて」

出エジプト記3章1~10節



日本基督教団千葉教会牧師

三吉 信彦

が原点となつて、出エジプトのリーダーへ。

二. 今日の日本の状況は逼塞している。経済、企業、就職難と行き詰まり。そういう時こそ、発想の転換を。道をそれてみることで展望を開けることもあるのではないか。

三吉個人は一九六七年に京大を卒業、前年は不況で仲間たちも道の転換を余儀なくされた。自分はキリスト教徒の家に育ち、洗礼も二才。順調に進学、父の後を追つて法律家を目指すも挫折。悩んだ末に神学校へ。モーセの挫折を思い起こす。

三. 七〇年学園紛争を経験し、仙川教会伝道師から直接開拓伝道を志す。ある程度目処がついた頃に、スランプが。その時、好善社のワーキングキャンプの誘い。ある種、日常性を離れて、ハンセン病療養所に足を踏み入れて、そこであのモーセの体験を。好善社前理事長藤原

偉作氏と療養所教会の信仰者を通して、神の熱情に触れる。国内療

養所で学生・社会人ワークキャンプを指導。そういう延長線上で、タイ厚生省医官カンチャナ女史と出会い、タイ国担当理事として深くタイのチャンタミット社と関わるようになる。

四. タイ国青少年ワークキャンプに参加する若者たち、生きる喜び、活かされる喜びを得ている。日常性を離れて、貧しいスラムに生きる人々、子どもたちと、労働を通して理解を深め合う中で、青少年たちは生き生きと育つてゆく。道をそれる中で与えられる新しい命の息吹、それをもって日常性に戻っていく。日常性の中で、いつも非日常性の時と場をもつ大切さ。教会の礼拝と日常生活の関係。使命をもって生きる中で、日々の生業にも新しい希望、喜びが与えられる。この逼塞した社会情勢の中で、非日常的な発想をもって乗り切つて欲しい。

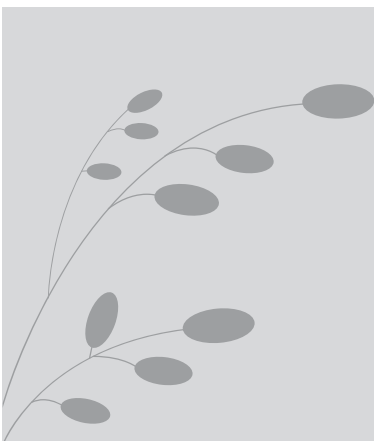
◆三吉 信彦 先生

一九四三(昭和一八)年生まれ。一九六七(昭和四二)年京都大学法学部卒業。一九七二(昭和四七)年東京神学大学院修士課程修了。

日本基督教団仙川教会、高の原伝道所を経て、一九九八(平成一〇)年に日本基督教団千葉教会の主任担任教師に就任し、現在に至る。

この間、家庭裁判所調停委員、少年院篤志面接委員、少年刑務所教諭師などを務める。一九九九(平成一一)年に社団法人好善社理事に就任。

三吉先生には十月六日(水)に多賀城キャンパス、土樋キャンパス(夜)の礼拝をご担当いただきます。



第36回 サマーカレッジ報告

「異文化との コミュニケーション -国際交流を考える」



大学宗教主任 出村 みや子

今年で三十六回目となる宗教部主催のサマー・カレッジが八月十一日から十三日の日程で秋保ホテルクレセントを会場として開催され、学生十九名（男性八名、女性十一名）、教職員と講師が十四名参加した。サマー・カレッジの主題は毎年学生の希望によつて選ばれているが、昨年の参加学生の中に様々な形で既に国際交流を経験した学生がおり、また新入生の中にも国際交流に関心がある学生が何人もいたために、今回の主題は「異文化とのコミュニケーション-国際交流を考える」に決定した。今年は学事暦の関係で例年より一週間遅い開催となり、参加者が少ないのではないかと懸念されたが、実際には例年より多くの参加者があった。

今年のサマー・カレッジのプログラムは、キリスト教学科三年の長谷部真君による開会礼拝で始まった。聖書はルカによる福音書十章二十五節から三十七節の「善いサマリヤ人」の譬えで、自己正当化をしようとする律法学者の姿は、自分が正しいとの思いにとらわれ

ると、周囲の人が見えなくなることをわたしたちに示しているという。さらに日韓併合百年に際して出された菅首相の談話に言及し、隣人に目を向け、どんなに離れたところにいる隣人に対してでも、相手が何を思っているのかに思いを馳せることが大切であり、相手に対する思いやりを持った時から人種や文化を超えた相互の国際交流が始まるのだということが語られた。以下に今回行われた三つの講演を簡単に紹介したい。

一日目のプログラムは「国際交流について語る」で、事前に開催された学生懇談会の際に提出されたアンケートに基づいて、国際交流の経験のある学生九名に各自の体験を話してもらった。高一の春にアメリカ・ベセスダ州に短期留学した体験、高二の修学旅行でイタリアの姉妹校を訪問した体験、ニュージラードに一年間留学した体験、中二の時に一週間オーストラリアに、また高一の時にタイを訪問した体験、今年の六月に改革派教会の国際会議に参加するためにアメリカ・ミシガン州に滞在した体験がそれぞれに語られ、報告した学生たちは今後海外に出かける人のために、交流先での暮らしや文化、食事、旅行中に注意すべき点などの具体的な助言をしてくれた。さらに韓国人牧師の教会に通って韓国との交流を行っている学生や、教会で外国人と会話しているという学生、伝道のために来日した

アメリカ人大学生のホームステイを通じて交流した経験を持つ学生、大学のサークル活動で外国人に日本語を教える活動をしている学生による報告もなされ、本学の学生が様々な分野で国際交流に積極的に関わっている様子を知ることができた。



◆学生による国際交流体験談◆

二日目のプログラムでは、本学の国際交流の歴史を辿って三人の講師による講演が行われた。前半には経済学部岩本由輝先生と仁昌寺正先生が「二人の卒業生を通して見た異文化とのコミュニケーション」というテーマで、大正デモクラシーに多大な社会貢献をした二人の卒業生の杉山元治郎と鈴木義男の足跡について語られた。今回は参加者全員にお二人の先生が執筆した『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男』（学校法東北学院刊行）が贈呈され、豊富な資料

に基づいて講演が行われたことに感謝したい。なお講演を聞いた学生からは、「日本史の教科書に載るような人物が東北学院の出身者であることを知って大変驚きました」、「学院のOBにあんなにすごい人がいたのかと感激しました」との反響が寄せられた。



◆岩本先生・仁昌寺先生◆



◆講演会の様子◆

二日目の後半には日野哲総務部長より「東北学院大学の国際交流の歴史」という題で具体的な報告がなされた。日野さんは現在の東北学院の国際交流の現状について説明した後、かつて国際交流部の担当職員としてアイサナス大学を始めとする大学間の交流事業に従事した経験や、本学が留学生を受け入れた際に生じた様々な問題や生活面での具体的な支援について語られた。



◆本学総務部長 日野 哲◆

三日目には野村信宗教主任より、「国際交流を通して得られた一つのビジョン」という題で、かつて研究のために訪問した海外での体験について、パワーポイントの映像を交えて講演がなされた。野村先生は外国へ行く上での留意点として、教会やクリスチャンたちとの交流・援助の重要性、旅の記録をつけること、安全面での諸注意を挙げ、さらに国際交流を

通して得た利点として、相互理解、人種差別や偏見の改善、それまで常識と思っていた理解が他国では異なっていること、人を愛することの大切さを挙げられた。その他のプログラムとして、一日目の夜には参加者の自己紹介を兼ねたフレンドシップの時間が持たれた。



◆フレンドシップ (親睦のひとつ)◆

二日目の午後には台風接近による雨のために秋保散策の予定が中止になり、屋内でのスイカ割りや、野村先生のフォークギターと英文科一年の五十嵐大介君のエレキギターによる歌と演奏にプログラムが急遽変更された。夜にはマーチー先生とお嬢さんのモーリーさんのヴァイオリンと、本学のオルガニストの渡辺真理さんによる恒例のクラシック・コンサートがレクチャー・コンサートの形で開催され、素晴らしい演奏を一同で堪能した。最後に永井義之先生が閉会礼拝で、マタイによ

る福音書十五章二十一節から二十八節の「カナン」の物語を、他者の発見による異文化コミュニケーションの観点からお話しされた。今年のサマー・カレッジは終了した。



◆クラシック・コンサート◆



◆礼拝の様子◆

雨のために野外プログラムが中止となったのは残念だったが、国際交流というテーマについて多くの学生が自らの体験を通して積極的に発言すると共に、教職員の講演からも多くの示唆を得ることができ、異文化とのコミュニケーションについて様々な角度から理解を深めるよい機会となった。また当初から学生が主体となって企画・運営することが望ましいと考えて準備を進めてきた成果が徐々に表れ、今年は事前に決めておいた役割分担のもとで各自が非常に積極的に参加していたと思う。来年の夏もプログラムの充実に向けて多くの学生が積極的に活躍してくれることを期待したい。



◆参加教員・学生◆

各キャンパスのメッセージ

Izumi

泉キャンパス
大学宗教主任

永井 義之



最近世界中の耳目を釘づけにした事件は、チリの鉱山での落盤からの救出劇でした。何と言っても、深さ七百メートル、閉じ込められたのはなおも落盤の恐れがあるわずかな空間に七〇日間、そしてその人数三三人でした。事件当初は生死もわからず、地上からの探索の掘削が必死で行われてはいましたが、場面が急展開したのはそのドリルの先端に紙が張り付けてあり三三人の生存が明らかになってからでした。あとはいかに三三人を救出するか策が練られ、実行に移されました。掘削の穴を広くし、カプセル状の乗り物で引き上げるといったものでした。三三人が一人ずつ地上に救出され人々は歓喜に包まれました。

事柄それ自体は単純なのかもしれませんが、人の生きようとする意志とか、困難に立ち向かう際の団結とか、リーダーシップの必要性とかさまざまなことが語られ、また事実私たちの関心をひきつけてやまない出来事でした。

Taqazyo

多賀城キャンパス
大学宗教主任

北 博



ある建築家のことを紹介します。その名は外山義。彼は、東北大学工学部建築学科を卒業後、スウェーデンで高齢者の住環境について学び、帰国後新しい発想によるグループホームの設計を次々と手がけましたが、二〇〇二年、五二歳の若さで急逝しました。彼は、お年寄りがどうしたらより快適な環境で幸せに生を終えることが出来るか、という問題に真剣に取り組み、それまで相部屋が基本だった特別養護老人ホームに、個室によるユニットケアやグループホームという形を導入したのです。

外山さんは、東北大在学中、当時教授だった宮田光雄先生の聖書研究会に連なっていました。科学技術は、その中に「心」を入れることによって、素晴らしいものとなります。是非学生時代に、幅広い教養と人生への姿勢を身につけて下さい。

Touchitoni

土樋キャンパス
大学宗教主任

佐々木 勝彦



「ラーハウザー記念礼拝堂」には、現在、少なくとも三つの入り口があります。実際に学生の皆さんが入り出すのは、その中の二つかと思えます。ひとつは、本館正面からみえる入り口、そしてもうひとつは、南側に位置する正面入り口です。南側の正面入り口の階段はかなり急こう配になっていますが、一度、是非こちら側から入ってみてください。そこにはふたつの歴史が刻み込まれています。ひとつは、右手の「車いす用のエレベーター」、そしてもうひとつは、両側の「手すり」の支柱です。

この「手すり」の支柱をよく見てみると、何か変です。上から下まで通っていたはずの支柱が、途切れています。何かあったのでしょうか。向かって左側の手すりで欠けているのは二本、そして右側は八本です。右側も元来は左側と同じ状態になっていましたが、「車いす用のエレベーター」の取り付けに伴って現在の形になりました。また正面右側の東側の入り口から入る階段の「手すり」にも、異変が起きているようです。そこには、三三本の支柱が切り取られた跡がはっきりと残っています。誰かが、何かのために切り取ったのです。

記録には残されていませんが、それは戦時中の「供出」のためであったと伝えられています。この礼拝堂は、まちがいなく「戦争」の惨禍を生き抜いてきたのです。

編集後記

秋の特別伝道礼拝特集号です。講師の先生方の話の要旨が再録してあります。それぞれのキャンパスで多くの学生諸君が聞きに来てくれたことを喜んでおります。泉で礼拝堂に入りきれなかった諸君は音声のみでしたが別教室での参加となりました。できれば、今後は映像音声が見聞きできる場所を確保したいと思っています。(NA)

二〇一〇年十月 東北学院大学宗教部
千九八〇一八五二

仙台市青葉区土樋二丁目三番一号

◆クリスマス礼拝のご案内

★第二十二回泉キャンパスクリスマス

十二月三日(金) 十八時三〇分

泉キャンパス礼拝堂

第一部

礼拝

説教者：日本基督教団 仙台松陵教会 牧師

田尻真介 先生

第二部

クリスマスコンサート

クリスマス・メドレー演奏、聖歌隊合唱、みんなで歌おう、キャンドルサービス、他

★大学クリスマス

泉キャンパス

十二月十六日(木)

十時一〇分

土樋キャンパス

十二月十六日(木)

十六時三〇分

多賀城キャンパス

十二月十七日(金)

十時二〇分

説教者：東京神学大学准教授

中野 実 先生

オラトリオ「メサイア」合唱

★第六十二回公開東北学院クリスマス

十二月十七日(金) 十八時

土樋キャンパス礼拝堂

説教者：日本基督教団 和歌山教会

清藤 淳 牧師

オラトリオ「メサイア」合唱